

この季節、紫が目立つノアザミ



田んぼに沿ってサイクリングをしても、こぼれ日の林間をそぞろ歩きしても、ノアザミの紫が目につく初夏の季節である。

アザミというと、なぜか富士山の「御中道」を思い出す。御中道は、富士山の5合目をぐるっと1周する登山道。標高2300mから2800mの間を上下する「ハイウェイ」だ。全行程は20kmを超えるので、一周に7から9時間を要するという。天気に恵まれれば、東側では箱根、丹沢連峰、西側では南アルプス連峰を望むことができる。

私が御中道の西半分を一人で歩いた1960年当時でも、御中道をアタックしようとする「バカ」はほとんどいなかった。早朝、富士宮の駅前に立つと相乗りタクシーの呼び込み。表口登山道を登る人たちと一緒に三合目へ。五合目まで歩いて右に逸れ、宝永山の噴火口を覗き込む。しかし、火口壁が崩れ込んでいて、期待した大穴はなかった。

交差点に戻って、山頂への道を振り返りつつ、御中道を西に進む。人気は全くなし。上るにしても、下るにしても、傾斜が緩やかなので、快適な気分。一帯は植物の上限になっていて、砂礫の

中に高山植物ががんばっている。そんな中、なぜか「アザミ」が印象に残った。いまとなっては、富士の名を冠した「フジアザミ」であったかどうかは定かでないが、そうだったのだろう。

やがて道は急な下りになり、樹林帯の中に入った。これから、山好きにはよく知られている「大沢崩れ」の、危険な下部を横断しなければならない。緊張する。岩崩れの発端である剣ガ峰は見えないが、石が落ちる音がカラカラとこだまする。いつまで待っても音が止まないので、エイヤツと走った。（のちに大沢は立入禁止になったと思う。落石に当たった人がいたのかもしれない。）

こんな経過で、「アザミ」の刻印がさらに鮮明に押されたのか？

大沢を過ぎて、ポツポツと人に会うようになった。しばらく歩いて、「御庭」に着く。溶岩の上に生え、矮小化したカラマツが面白かった。

